

その後大正五年十二月、北里柴三郎の新しい構想の元に文部省の認可が下り、信濃町の二万坪の軍用地の払下げを受けた。天皇より三万円の御下賜金があり、財界より三百万円の寄附が集り、今日の慶応大学医学部が誕生した。

三、成医会講習所

現在の東京慈恵会医科大学は、高木兼寛により留学生先のセント・トーマス病院医学校の様式をとり入れて造られた大学及附属病院である。そして皇室と密接な関係のある貧民救済の慈善病院である慈恵医院を造った。

高木は宮崎県東諸郡高岡町穆佐の出身である。明治五年海軍に入り、恩師石神良策と英人医師ウイリアム・アンダーソンの推薦で英国セント・トーマス病院医学校に五年間留学し、優等生で卒業した。高木兼寛は帰国した翌年の明治十四年五月一日、「成医会講習所」を京橋区鎗屋町の東京医学会社の一室を借りて夜学で開校した。次いで天光院に一時移転し、明治十五年十一月から二十四年一月まで、「海軍医務局学舎(軍医学校)」と同居した。講義は主に海軍軍医が行った。修業年限は四年で、明治二十四年四月に海軍軍医学校と分かれ独立した。

明治三十六年には教育も充実し、「私立東京慈恵医院医学専門学校」に昇格した。

(平成五年三月例会)

紹 介

Takeo NAGAYO:

History of Japanese Medicine in the Edo Era-IIs
social and cultural backgrounds.

欧米の言語による日本医学史についての著作は残念ながらそれほど多くはない。この「情報の貧困さ」のためであろうか。たとえば明治四十四年、文部大臣官房文書課発行の富士川游著「Geschichte der Medizin in Japan」が一九七六年になつてもドイツの出版社によりそのまま再出版されている。もちろん、グローバルな観点から人類の医学とその歴史を描写している著作の中には、日本に関して一章を割いているものもある。たとえば「Histoire de la Medicine, de la Pharmacie, de l'Art Dentaire et de l'Art Vétérinaire」(パリ、一九七八年)はその代表的なものである。

しかし、このような概括的な著作の場合、その範囲、目標、ページ数などに制約があつて、日本の紹介はきわめて一般的、概略的なものに留まっている。日本のみに焦点を合わせ、科学史の一環として日本医学の歴史的発展を追及している Sugimoto, Swaine 共著 「Science & Culture in Traditional Japan」(東京、一九八九年)は最近出版された力作であるが、かなりの専門的知識を必要とし、恐らく知日派の主要

な文献の一つになるであろう。

日本医学史に興味を抱いている者は、その殆どが日本人同僚と共同研究を進めている外国人医師や医学生であつて、大抵は日本語力が十分でなく、その上医史学の文献を捜したり、研究したりする時間も不足している。これらの人々にまづ必要なのは、信頼できる概説書である。また、日本人の方でも、特殊な現象や概念が多く現われる祖国の医学史を外国人に的確な英語で紹介するのに、しばしば困難を覚えていたようである。この双方の要望に添うべく、長与健夫氏が昨年大変有用な書を著された。

本書は江戸時代への簡単な入門部に始まり、それに続く江戸時代以前の医学に関しては殆ど十六世紀、即ちヨーロッパ人が日本に上陸し、キリスト教とイベリア半島の医学をもたらしした時代に限って論じている。本論の江戸時代は三部に分かれており、まず第一部は十七世紀における中国や南蛮医学から紅毛医学への移行期、第二部は十八世紀の紅毛医学の受容と普及、そして第三部では十九世紀の円熟期及び近代医学への幕開けを取り上げている。次いで江戸時代を通じての医学や関連分野に関する概説がその後続く。最後には参考文献目録、人名や書名等の索引が付けられている。

本書は近世だけを扱っているが、その読者層を考えると、それは賢明な選択であつたように思われる。明治前後に見られる日本医学の飛躍的な進歩の踏み台は江戸時代に築かれたからである。江戸時代は鎖国という興味の尽きない時代であ

ると同時に、日本が「蘭学」の一環として西洋医学を積極的に取り入れ、ヨーロッパの政治、経済、及び学問上の動きを常に把握しようとした時代でもある。この時代についていくらかでも知識が増せば、現代日本への理解はより容易になり、さらに深まることであろう。本書の著者が当時の社会的、文化的な背景を重んじているのは決して偶然ではない。

本書においては、前述したように日本医学のそれぞれの発展段階に現われた主な人物、著作、文化的、社会的特徴などについて、分かりやすく解説されている。中医学や儒教のようには、外国人には予備知識が欠けていると思われる箇所についてはもう少し詳細な説明が欲しい。さらに欲を言えば、本書の中に出てくる主な事項、人物などに注釈を付け、巻末に関連文献を挙げておけば、さらなる利用しやすなものになつていたのであろう。また、参考文献目録に挙がっている日本語の論文名まで英訳されているが、誤解を招かないため、原文は日本語であることを示す何らかの印を次の版では是非とも付けて欲しいものである。

このようなささいな点は別として、本書は外国人研究者の、近代日本医学史への取り組みをかなり容易にするもので、多くの外国の方々に一読をお勧めしたい。

(ヴォルフガング・ミヒエル)

(名古屋大学出版協会、名古屋市中種区不老町名古屋大学構内、

電話〇五二一七八一一五〇二七、一九九一年、A五判、二一〇

頁、三六〇五円)